

## 「すぐそこにある遭難事故」を読んで

金邦夫さんから最新著書、『すぐそこにある遭難事故』をご恵送頂いた。サブタイトルに「奥多摩山岳救助隊員からの警鐘」とある。

金さんは、知る人ぞ知る奥多摩山岳救助隊の副隊長だった方。警視庁青梅警察署山岳救助隊に 20 年間勤務、本書以前に奥多摩における山岳遭難救助に関する本を 2 冊出版されている。1 冊目は 2002 年『奥多摩登山考』、2 冊目は 2007 年『金副隊長の山岳救助隊日誌』である。どちらもユーモア溢れていながら鋭く射た遭難警鐘本で、以来金さんの大ファンになっている。

3 冊目が本書『すぐそこにある遭難事故』、最初の項は「100 回転落すれば刃でも奥多摩でも結果は同じ、侮るな『東京の山』。遭難件数は常に上位」で、遭難事故はすぐそこにあると、金さんは指摘するのだ。「奥多摩は『東京の山』という手軽なイメージもあって、ジーパン、スニーカーなどで、運動などあまりしたことのない人まで出かけてくる。ところがどっこい、東京の山といえど谷は深く尾根は急峻である。山は非日常の世界だからまかり間違えば命を落とすことになる・・・などと考えた事もない登山者が、『奥多摩くらいなら』と気軽にやってくるのである」、と金さんは懸念を表明。

遭難原因の多くは、道迷いと転倒・滑落。当事者は、高齢の男性で単独行の人が多い。最初に紹介されている遭難例は立川の S さん、64 歳。S さんの事故の原因は、沢の高巻きで滑落したことだが、なによりもまず、最初に道に迷ったとき引き返さなかったこと。そして、一番やってはならない、沢に降りたこと。しかも単独行で、行き先を明確にしておかなかったことだと、金さんは指摘。

道に迷えば「あれっ、おかしいな」とだれもが感じるはず、登り返して正しい道を探すのが基本。しかし、経験不足の初心者には、登り返す体力と気力が残っていない。S さんは沢に降りてしまい、高巻きに失敗して滑落、打ち所が悪く身動きできなかったのだろう。ザックを枕に仰向けに倒れていたという。致命傷はなく、死因は低体温症であると思われるとあるから、単独行でなければ大事にいたらなかったはず。家族に行き先を明確にしておけば速やかに捜索活動がされて、大事にいたらなかったかも知れない。「奥多摩での大きな事故には、このケースのなんと多いことか」と金さんは嘆息。「インターネットで引き出した情報のみを頼りに単独で登山する高齢の初心者は、いったん難に遭遇したら最悪の結果を招きかねないことをよく自覚して行動してほしい」と。

どの項からも、事故防止を願う金さんの思いが伝わってくる。金さんが警鐘を打ち鳴らすように、我々も警鐘を打ち鳴らしたら、ネット情報だけで気楽に入り込む登山者も減少するのではあるまいか。警鐘を大きく打ち鳴らせるよう、『すぐそこにある遭難事故』をぜひ読んで頂きたい。